

# スタンダールの『アルマンス』 における女性抑圧と性愛－(1)

Sexualité et contrainte féminine dans 《Armance》 de Stendhal－(1)

---

内 田 善 孝

UCHIDA Yoshitaka

La sexualité dans Armance n'a pas attiré l'attention des chercheurs, parce que le héros est impuissant. Pourtant impuissance ne signifie pas absence de pulsion sexuelle. Stendhal parsème son texte de mots qui accentuent la pureté de l'amour des héros et la description physique de ses personnages ne descend pas au-dessous du cou. Armance, jeune orpheline, subit des contraintes sociales et économiques plus fortes que celles d'Octave. Leurs caresses dépassent rarement l'effleurement et, au moment où ils commencent à se communiquer leur amour, leur discours est soudain court-circuité : le discours indirect s'immisce dans le discours direct de leur tête à tête pour empêcher les deux jeunes amants de s'avouer leurs sentiments sans l'intervention du narrateur. Cet état d'oppression dessiné par le roman représente la société française sous la Restauration. Pourtant la pulsion sexuelle chez Stendhal est plus forte que ces contraintes; elle apparaît timidement d'abord dans une épigraphe et ensuite assez hardiment juste avant le dénouement. Octave est tout le temps comparé à Alceste, mais il a aussi les traits d'un autre personnage: ceux de Don Juan.

『恋愛論』第一部第一章でスタンダールは以下のように述べている。

「肉体的な快楽は自然現象だから、だれでも知っている。しかしこれは愛情深く情熱的な魂にとっては従属的な地位しかもたない。」

すなわち性的快楽は自然人としての人間すべてに備わっているものであるが、情熱的な魂をもった者にとっては副次的な価値しか持っていない。性の快楽は人間の動物的な側面に属する。情熱愛におちいるものは本能の衝動を抑え、性欲を制御できる。こう書いた後スタンダールはさらに続ける。

「貞淑で愛情深い情熱的な女性のなかには、肉体的快楽のことをほとんど考えない人がある。いわば、そういう快楽にはめったに身をさらしたことがなく、そうしたときにさえ情熱恋愛の

恍惚がほとんど肉体の快楽を忘れさせるのだ。」

非常に限られたケースであるが、献身的で愛情深い女性は性欲が何であるかさえ知らず、欲望に身を焦がすこともなく、情熱の高揚の中では性的快楽を無視さえする。これは女性について限定されており、不思議なことに男性は除外されている。男性が肉欲を抑制できるのかどうか明示せず、この文章のすぐ後でスタンダールはこうした献身的女性に対して、全く意外な種類の男性を対照させている。

「救いようのない自尊心、アルフィエリ風な自尊心の犠牲になり、その傀儡になっている男がある。こういう連中はネロのように他人を自分自身の心に基づいて判断し、常にびくびくしているから、たぶん残酷であるが、最大限の自尊心の満足がともなわないと肉体的快楽に達しない。つまり快楽の相手に残酷なことをしないとだめなのだ。『ジュスティーン』のあの恐ろしい残虐はここから生まれる。」<sup>註1</sup>

性欲に汚れることなく、献身的な愛に打ち込む女性に対置されているのは、欲望の対象を苦しませて性欲を満たすサドの男主人公のような男性である。女性については性欲は無視さえできると述べているのに、自尊心過多の男性に関しては性的快楽にはサディズム的要素が含まれていると説く。スタンダールは女性全般、男性全般について述べているわけではなく、少数の女性、男性のある者という言い方で限定的に語っているが、注目すべきは情熱愛に生きる女性が選ばれているのに対し、他者を自己中心にして判断する自尊心過多の男性が対置されていることである。不思議な対置としか言いようがない。『恋愛論』の第一章の冒頭で情熱愛を紹介している個所では、情熱愛の男性の例として Vésel大尉と Centoの憲兵が挙げられているので、当然こうした情熱愛の男性を献身的な女性に対照させることもできたはずである。ところがスタンダールはアルフィエリ、ネロ、『ジュスティーン』の主人公を対置させている。この一見意外な対照は何を意味するのか。女性の献身的な愛に自尊心過多の男性が目覚めて、昇華していく。これこそ情熱愛が生成発展していく過程だと示唆しているのではなかろうか。こう考えると一見奇妙な対照と思われる献身的な女性と自尊心過多の男性の対置も、いささかもちぐはぐではなく、スタンダールの脳裏に醸成されていた情熱愛の組み合わせが示されているだけのことである。

『恋愛論』のこの個所はそれほど注目されることがなく、この不思議な対置について誰も注意を喚起することはなかった。だがここで示されている女性と男性にアルマンズとオクターヴを置き換えることが可能である。オクターヴは不能で、性的快楽を充足できないとただちに反論が起こるかもしれないが、不能は性欲を持っていないではなく、持つことは可能だが、単に満足させられないだけである。オクターヴにしるジュリアンにしる、彼らは「救いようのない自尊心、アルフィエリ風な自尊心の犠牲」である。

これまではオクターヴの不能が前面に出され、『アルマンズ』における性愛がほとんど研究されないうえにできた。しかし男主人公が不能という理由で、『アルマンズ』をまったく性愛とは無関係な小説と考えて正しいのであろうか。オクターヴの肉体的欠陥に惑わされないで、テキストに密着して分析する必要がある。

### 禁欲、純潔、無垢

『アルマンズ』に性愛を見いだすのが困難と考えるのは、実はテキストの中に禁欲につながる表現が多いからである。オクターヴは自分が不能である気がついた15歳の時から、修道院生活にあこがれたり、<sup>12</sup> 修道院の独居房に似ているからという理由で、理工科大学の個室を懐かしがったり、化学に熱中して実験室に閉じこもったり、<sup>13</sup> 社会とのつながりを避けて、孤独に引きこもろうとする。女主人公にも同様な禁欲の傾向が見られる。オクターヴを愛していることに気がついたアルマンズは、自分の情熱を制御するためになんらかの外的障害を設ける必要を感じる。修道女になることを考えつくが、それではオクターヴと二度と会えないので、自分の寝室を修道院の独居房に模様替えすることで自分の高ぶった心を静める。<sup>14</sup>

純潔については一般的に女性特有と考えがちだが、オクターヴにも見られる。オクターヴが〈*que je voudrais pouvoir rendre mon âme pure au Créateur comme je l'ai reçue!*〉と言うと、伯父のスーピラヌが、〈*voilà depuis un an le premier désir que je vois exprimer par cette âme si pure qu'elle en est galcée!*〉<sup>15</sup>と機知をこめて答える。

純潔な心の持ち主オクターヴは理想の相手に世故に汚れていない清らかな心を求めている。<sup>16</sup>

純潔も無垢もほとんど同じような意味だが、無垢に無知のニュアンスを強めると、子供の無垢になる。主人公達はそれぞれ20歳、18歳と設定されているので、もちろん子供ではない。しかし彼らはしばしば〈*mon enfant*〉、〈*mes enfants*〉<sup>17</sup>とマリヴェール夫人から呼ばれている。オクターヴの母であるから、彼女が「子供たち」と呼ぶのになんら不思議はないが、単なる愛称だけではなく、そこには無垢の意味合いが込められている。オクターヴとアルマンズは母の目にも異質な存在に映っている。

他人が彼らを「子供」と見るだけでない。オクターヴは子供の幼稚さが抜けない自分に憤慨している。〈*Avec tout l'orgueil d'un enfant, en toute ma vie je ne me suis élevé à aucune action d'homme*〉<sup>18</sup>ここでも「子供」は無垢で無知な存在の意味を持っている。自分の部屋が一階のサロンに押しつぶされて息苦しい雰囲気なので、亡命貴族に対して支払われる補償金二百万フランを部屋の改装に使おうと、見積もり表などを取りだして計算する。この時も、〈*Il sentait qu'il faisait l'enfant*〉<sup>19</sup>と、「子供」の無邪気さが描かれている。同様な純真さはアルマンズの性格の特徴でもある。〈*On trouvait quelque chose d'asiatique dans les traits de cette jeune fille comme dans sa douceur et sa nonchalance qui, malgré son âge, semblaient encore tenir à l'enfance.*〉<sup>20</sup>

子供の無垢さでも不足であるかのように、主人公達は天上の存在、超人間にたとえられる。母親のマリヴェール夫人は、〈*je sens en lui quelque chose de surhumain; il vit comme un être à part, séparé des autres hommes.*〉<sup>21</sup>と、息子の異質さを嘆く。彼らの心は〈*âmes élevées*〉<sup>22</sup>であり、彼らが話す言葉にはなにかしら天上の響きを感じられ、<sup>23</sup> ついには天上から地上に迷い着いた天使に比べられる。<sup>24</sup>

こうした二人の主人公を引きつける親和力は愛の名で呼ばれず、友情と呼ばれる。しかも友情という言葉を修飾するのに、スタンダールは最上級を使用して至高の友情であることを強調する。

<l'amitié la plus dévouée et la plus exclusive><sup>注15</sup>。これだけでは愛に対する予防措置が足りないかのように、ついには<l'amitié la plus sainte><sup>注16</sup> と友情に聖性を付し、性欲で汚すことが不可能な関係に高めている。

ここまで主人公達の精神的側面を調べてきたが、彼らの肉体描写の仕方からも禁欲的な側面が見られる。オクターヴとアルマンス、それに副登場人物のそれぞれの肉体描写を列挙してみる。

#### Octave

<une taille élevée, des manières nobles, de grands yeux noirs les plus beaux du monde><sup>注17</sup>  
<Ses cheveux du plus beau blond qui retombaient en grosses boucles sur le front qu'il avait superbe><sup>注18</sup>

#### Armance

<de grands yeux bleus foncés><sup>注19</sup>  
<les cheveux courts et retombant en fort grosses boucles autour de la tête><sup>注20</sup>  
<sa taille souple et légère, les grosses boucles de cheveux qui s'échappaient sur ses joues><sup>注21</sup>

#### Mme de Bonnavet

<Des traits d'une régularité parfaite, de fort grands yeux et qui avaient le regard le plus imposant, une taille superbe et des manières fort nobles, un peu trop nobles><sup>注22</sup>

#### le chevalier de Bonnavet

<un être petit, fort pâle;il avait le visage gros><sup>注23</sup>

その他の登場人物、マリヴェール夫人、マリヴェール氏、ドーマル夫人、スピラーヌ伯父などについては年齢が判明するくらいで、肉体描写は省略されている。さて上記の一覧を見てすぐに気がつくことは、肉体描写が顔に集中していることである。目、髪、額、頬、顔の形がほとんど月並みな表現で描かれている。胸や下半身といった性に関する部分については知りようがなく、肉体もまた禁欲的態度で描かれているのが分かる。

スタンダールのこうした女性の肉体描写を、彼が愛読したタッソの『エルサレム解放』と比較してみると、19世紀前半のフランス文学作品においていかに性的描写が抑圧されていたかが分かる。タッソは16世紀イタリアで活躍した詩人で、彼の『エルサレム解放』はアリオストの『怒れるオルランド』とともに当時のヨーロッパ諸国で広く愛読されただけでなく、19世紀にいたるまで影響を及ぼした。エルサレムを解放しようとする十字軍に対抗して、回教徒側はいろんな策を講じて防戦する。アルミドは自分の性的魅力で十字軍の勇士達を魅了し、戦線から離脱させる役割を担う。彼女の肉体描写を以下に引用する。

<Jamais Argos, jamais Chypre ou Délos ne virent une figure si parfaite, des traits si

touchants. L'or de sa chevelure tantôt brille au travers du voile transparent qui la couvre, tantôt se dérobe au voile même et répand un plus vif éclat. (. . . .)

Ses cheveux flottent en ondes sur ses épaules, et le zéphir, en se jouant, y forme des ondes nouvelles. Son oeil, avare des trésors de l'amour et des siens, les cache sous sa paupière abaissée. Sur son teint, l'incarnat de la rose se mêle et se confond avec l'ivoire; mais sur sa bouche, qui respire un souffle amoureux, brille le seul incarnat de la rose.

Sa gorge à demi nue étale la blancheur de l'albâtre le plus pur: c'est là qu'Amour repose; c'est de là qu'il lance et ses traits et ses feux. Deux globes, arrondis par la main des Graces, s'élèvent et s'abaissent tour à tour: l'oeil en découvre une partie, l'autre est cachée par une robe envieuse et jalouse, impuissante barrière qui résiste aux regards et ne peut arrêter la pensée: moins enchantée de ce qu'on voit, qu'avidé de ce qu'on ne voit pas, l'imagination s'élançe et pénètre les appas les plus secrets.

Tel qu'un rayon de lumière passe à travers l'onde ou le cristal, sans les diviser; telle l'imagination perce les voiles les plus sombres et les plus épais: elle erre au milieu des merveilles les plus cachées, les contemple à loisir, et les peint ensuite au désir qui brûle et s'enfalmme encore davantage. ><sup>注24</sup>

アルミドの髪や目はもちろん描かれているが、タツソの筆は彼女の胸のふくらみに集中し、衣服により隠されている下半身は想像力があくことなくなめまわす。なんと自由おおらかに性的描写が行われていることか。それに比べて、『アルマンズ』における肉体描写はなんと抑圧されていることか。文明は人間を軟弱にしたと、スタンダールは考えているが、宗教や風俗が制約を強化し、社会がより洗練されていくにつれ、文学における自由は縮小し、こうした肉体描写にもその影響は如実に表れているのが分かる。

### 社会による性的抑圧

1789年を境としてフランス社会から摂政時代の陽気さが消滅したと、スタンダールは繰り返し嘆く。<sup>注25</sup> ナポレオンは執政政府の乱れた風俗を矯正し、みずからの帝政維持のため、フランス社会に貞淑ぶった風俗を持ち込み、王政復古政府もまたコングレガーションの指導のもと風俗浄化に取り組む。こうして性は摂政時代の解放された雰囲気から、宗教的窒息の中に押し込まれる。このことは『アルマンズ』の中にも感知できる。<sup>注26</sup> 貞淑ぶり、偽善的な貴族の先頭に立つのがアングル夫人、ロンズ夫人のグループである。彼女達はオクターヴとボニヴェ夫人の関係を疑いの眼で詮索する。ボニヴェ夫人は年老いた侯爵の再婚相手で、年齢は三十代、非常に魅惑的な女性であり、オクターヴは四六時中彼女のサロンに出入りしている。彼女を取り巻く友人達は彼女とオクターヴを監視し、二人の仲を憶測する。<sup>注27</sup> 王政復古の貴族社会は自由な社会ではなく、相互監視のもとにあり、常に他人の目が光っている。<sup>注28</sup> サロンだけではなく、オクターヴ達が散歩に出るときも風俗矯正の視線がつきまとう。<sup>注29</sup>

オクターヴにとってはアルマンズと一緒にいることが大切なのであるが、当然うら若いアルマンズ

と二人だけの時間、空間を共有することは不可能なので、後見人ボニヴェ夫人を利用しているだけである。しかしこの方策も周囲の監視が強くなり、いずれは匿名の手紙がボニヴェ夫人に送り届けられ、彼女のサロンに自由に出入りすることが不可能となるのではないかと、オクターヴは危惧する。<sup>IE30</sup> 風俗の乱れを嘆く人々は単に監視や仲間内での非難で満足することなく、匿名の手紙という陰險な手段に訴えることも辞さない。こうした危険を察知して、オクターヴはドーマル夫人を盾にしようとする。ボニヴェ夫人とはたんなる親戚関係だったが、ドーマル夫人はスタンダールが好む三角関係の一角を占める女性である。

不思議なのは男女の愛情関係が、見せかけであれ、オクターヴとドーマル夫人のあいだに築かれると、風俗矯正に積極的な連中の影が薄くなる。あれほどボニヴェ夫人を監視していた口うるさい連中の非難がドーマル夫人にはいっこうに向けられない。ということはドーマル夫人は男性支配の社会から解放された女性ではないだろうか。性の社会的抑圧は男性が支配するための一つの手段であるが、彼女は父からも、夫からも制約を受けない自由な女性である。結婚はいささかも彼女を束縛できず、天真らんまんな性格、自分の移り気のままに行動する。

男女の関係が社会的に監視され、非難の対象となっている一方、オクターヴと人妻ドーマル夫人の不倫が大目に見られ、黙認さえされている。ドーマル夫人の助力のおかげで、夫が聖霊騎士団に叙勲されたボニヴェ夫人はアンディイの屋敷に彼女を招待し、まるで二人の密会を助けるかのように、オクターヴの寝室の上に部屋を設ける。夕食の後、偶然オクターヴとドーマル夫人が時をほぼ同じくしてサロンから立ち去る機会があった。〈Probablement Octave et madame d'Aumale se promenaient ensemble ; cette idée, qui vint à tout le monde, fit pâlir Armance.〉<sup>IE31</sup> 人々は彼らが二人だけで夜の闇にまぎれて散歩しているのだろうと想像するが、だれも咎めない。ボニヴェ夫人は昼間、衆人環視の中でオクターヴと散歩に出て、口さがない連中の非難を浴びたのに、ドーマル夫人は真夜中、オクターヴとたった二人で散歩しても、それが当然のことであるかのように黙認される。アルマンズにいたっては、二人が散歩していると想像するだけでなく、オクターヴが寝室にその夜戻ってきていないことを確認し、二人が夜をともに過ごしたと誤解さえして、嫉妬に苦しむ。これはまったくの誤解ではあるが、アルマンズはこの不倫を非難することはない。逆にそれを認めて、嫉妬する。

性の風俗が監視されていた王政復古の貴族社会において、人妻の中にはいわゆる「解放」された女性達がいた。結婚により父権から解放されるや、夫の権力に屈することなく、いくらかの自由を手に入れた女性達である。ドーマル夫人はそうした人妻の代表と言えるだろう。これは性的放縦に走った18世紀の、『危険な関係』のメルトゥイーユ型の偽善的な「性的に自由な女性」ではなく、スタール夫人系統の「解放」された女性の出現である。『アルマンズ』の成立に深い関りがあるデュラス夫人も、こうした性的、政治的に「解放された」人妻の一人だった。シャトーブリアンを愛し、自宅のサロンにボナパルティストを招待していた。<sup>IE32</sup>

## 処女に対する社会的抑圧

人妻に対する性の社会的抑圧、および人妻の「解放」はこれくらいにして、次に処女に対する抑圧の分析に移ろう。

性行為を結婚という社会制度下に置き、宗教的に管理しようという力は王政復古の下でいっそう強化され、大革命により認められた離婚が再び禁止される。処女に対する管理も特に貴族階級で厳しかった。

### 1) 経済的抑圧

アルマンスは両親を亡くし、財産もほとんどない。実はこの設定自体が当時の結婚に対する批判となっている。マリヴェール氏がオクターヴとアルマンスの結婚に反対する理由として挙げるのが、まさしく財産と一族郎党の支持である。親達が結婚に期待するのは愛ではなく、いかに家名を上げ、家産を後世に残すか。オクターヴ個人の問題ではなく、家の問題なのである。民法典作成者のひとりポルタリスは結婚を、「種の保存を永久化し、互いに助け合って人生の重荷を分かち合って負担し、共通の運命をになう」<sup>註33</sup>と規定している。すなわち結婚の第一の目的は子孫を残すことであり、第二は互いに助け合って生活の重荷、すなわち生活する上での物質的苦労を分担することである。言い換えれば種の保存と経済活動を保証するのが結婚の役割である。

オクターヴは十字軍以来綿々と家系が続く由緒あるマリヴェール家を存続させる役割を担わされ、長い系譜の一つの鎖の輪でしかない。だからことあるごとに貧しさが強調されるアルマンスは、結婚相手としてはまったく価値のない乙女である。財産の欠如により、貴族社会の中に結婚相手を見つけれないアルマンスは、社会身分で格下のブルジョワ階級の男性との結婚が似合いということになる。

アルマンスに対しては、まず経済的な抑圧が加えられており、彼女の態度を特徴づけるのは <retenue>、<réservee><sup>註34</sup>であり、<on n'y voyait ni coquetterie, ni assurance><sup>註35</sup>である。他の結婚適齢期の貴族の乙女とは異なり、アルマンスは自己を抑制し、内面化していかざるを得ない。

### 2) 社会的な礼法

貴族社会では礼法がとくに強調され、礼法を遵守せざるを得ない。これも一種の社会的抑圧手段であり、主人公達は礼法の範囲の中で愛を交わさざるを得ない。オクターヴが決闘で負傷し、死ぬかもしれない瀬戸際でも、礼法にこだわっている。<Je ne sais si les convenances permettent que vous me voyiez pendant ma maladie; je crains que non.><sup>註36</sup> 礼法が彼らから自由を奪っている。アルマンスがボニヴェ家の祖先の地、ポワトゥ地方に行ったとき、オクターヴは寂しくて仕様がなない。しかし彼はアルマンスに直接手紙を書いて孤独を紛らすことができない。なぜなら結婚前の乙女に手紙を書き送ることは礼法に反するからである。しかたなく彼は一緒にいるボニヴェ夫人に手紙をしたためる。宛名はたしかにボニヴェ夫人であるが、そこに書かれている内容はアルマンスにあてられた優しい愛の気持ちである。<sup>註37</sup> オクターヴは礼法に従わざるを得ないが、それはひとえにアルマンスを保護する思いやりからである。自分一人のことであれば、彼は社会的規制に敢然と向かっていく青年

である。

さて女性であるアルマンは自分の身を守るために礼法を自らの武器とする。従うのではなく、それを利用する。ポワトゥから戻り、彼女はドーマル夫人に対する嫉妬に苦しむ。嫉妬は彼女にとり抑え難い感情で、どう対処してよいか分からない。

＜elle sentit pour la seconde fois de sa vie les atteintes d'un sentiment affreux, surtout quand il se rencontre dans le même cœur avec le sentiment exquis des convenances. Armance croyait avoir à cet égard de graves reproches à se faire. Je dois veiller sur moi d'une manière sévère, se disait-elle＞.<sup>238</sup>

ここで注意すべきは、嫉妬が＜un sentiment affreux＞と嫌悪すべき感情と表現されているのに対し、礼法は＜le sentiment exquis des convenances＞と、苦しむアルマンの心を静めてくれるような肯定的な価値を付与されている。嫉妬という内的感情を制御できなくなり、礼法という外的義務に自らを託す。懸命にバケツで自分の家の火事を消そうとしたが、それより消防に頼んだほうが便利というわけである。ただその分社会に依存することになり、社会を無視して情熱愛に生きることは難しくなる。

### 3) 世間の評判

乙女にとり世間の評判は最重要である。アルマンとオクターヴは互いに話し合い、相互に惹かれる気持ちを確認め合うことが可能だが、彼らのケースはむしろ例外で、普通の場合は親同士が結婚を決め、若い二人は婚約の時初めて顔を合わせた。こうした社会においては、評判がとくに乙女の価値を決定する。<sup>239</sup> アルマンもまた評判に無関心ではない。しかしこれは有利な結婚をしようとするわけではなく、愛するオクターヴの尊敬を失うことをひたすら恐れるからである。ポワトゥのポニヴェ家の城の修理のためオクターヴと離れて暮らす日々、アルマンは召使の間でささやかれている自分の噂を知る。＜Armance se donnait (les apparences de passion), disaient-elles, afin de devenir vicomtesse de Malivert; ce qui n'était pas mal pour une pauvre mademoiselle de si petite naissance.＞<sup>240</sup> 裕福な家柄の跡取り息子をたぶらかして、玉の輿に乗るかのような噂におののき、彼女は決してオクターヴと結婚しないことを自らに誓う。

しかしアルマンはオクターヴの幸福が問題になると、世間の評判に敢然と挑戦する。オクターヴが決闘で負傷し、クラマールの農家に瀕死の状態にいるのを知り、アルマンは自分の評判が傷つくのを恐れず、一刻も早く愛する人の看護に向かおうとする。＜Que me fait le monde et ses vains jugements? se disait-elle, je ne le ménageais que pour lui＞<sup>241</sup> 評判を恐れるにせよ、決然と対決するにせよ、すべてそれはオクターヴのためである。アルマンの情熱は自己愛をしりぞけた献身的愛と言える。

一方オクターヴは世間の評判など自分のことに関してはまったく気にかけない。しかるにアルマンのことになると、異常なほど神経質に彼女の評判を守ろうとする。ドーマル夫人からアルマンへの愛を指摘されたとき、瞬間的にオクターヴの脳裏に浮かんだことはアルマンの評判を傷つけない

ことである。

<Octave vit à l'instant que s'il ne répondait pas rapidement et de l'air le plus calme à madame d'Aumale, la réputation d'Armance pouvait souffrir. Il passait sa vie avec elle, et le mot de madame d'Aumale avait été saisi par deux ou trois personnages qui le détestaient ainsi qu'Armance.><sup>42</sup>

巧みにオクターヴはこの疑いをもみ消すことに成功する。独りになったとき、彼を襲うのは死の願望である。ところが自殺すれば、その動機がいろいろ詮索され、アルマンズに対する彼の気持ちが疑われ、彼女を巻き添えにする。

<Si je me tue, Armance sera compromise; toute la société recherchera curieusement pendant huit jours les plus petites circonstances de cette soirée.><sup>43</sup>

アルマンズを愛していることが彼の目に明白になったとき、オクターヴは彼女の近くで生きることも、また死ぬことも自由にならず、ギリシャへの義勇軍参加という方便を考えつく。アルマンズの評判を危険にさらした今、どんなに愛情が強くとも彼女の近くに止まることはできない。彼は愛する女性の平穏な生活を乱してしまった。<sup>44</sup> オクターヴはあくまでアルマンズの評判を守ることが自分の義務と心得ている。しかしこれはあくまで貴族<honnête homme>の義務から発生した行為で、献身的な愛ではない。

#### 4) 監視

ほとんど毎日顔を合わせる二人であるが、常に衆人監視の中でしか会えない。サロンではアンクル夫人のような意地悪な連中がたえず耳をそばだて、散歩に出ても後見人のポニヴェ夫人と一緒にいる。散歩者達から距離を置いて、二人だけの時間を持つのがやっとなのである。婚約前の主人公達が二人だけの時間と空間をもてることはない。たとえあったとしても、他者の目を常に警戒している。ドーマル夫人からアルマンズを愛していることを指摘され、オクターヴは苦悩の一夜を森の中で気を失って過ごす。そして早朝アンディイの館に戻ったとき、庭を散歩するアルマンズに出会う。冷酷なオクターヴの言葉に、アルマンズが失神すると、オクターヴはただちにあたりを見回し、だれにも見られていないか確認する。<Il vit que la caisse de l'oranger le dérobaît à la curiosité des habitants du château.><sup>45</sup> このようにたとえ早朝の人気のない庭であろうと、どこから人が監視しているか分からない。

ナポレオン帝政、王政復古は実は監視社会なのである。警察は私信をのぞき、いたるところに密告者がいて、監視の網を張っている。人がどんな本を読んでいるかは衆知なのである。オクターヴが新聞を買って、レストランに入り、個室に入り、ひそかに読むシーンがある。読み終えた後、証拠を残さないため、新聞を暖炉で焼却してからレストランを出る。<sup>46</sup> この場面がなぜ恋愛の筋に必要なのか。それは監視が強化された状況下の貴族社会で、情熱恋愛がどのように成長するのか、これが作者の意図だからである。フランスという気候・民族、王政復古という時代、貴族社会という環境の中で、優しい心を持ったふたりの男女の愛がどのように試練を乗り越えていくのか。これが『アルマンズ』の

主題ではなからうか。

オクターヴとアルマンズが二人だけの親密な空間を持つことは不可能で、常に監視の目が行き渡る範囲でしか二人の時間を享受できない。それでも監視が弱められることがある。主人公達に敵対する人々だけではなく、彼らを保護する人物もいるわけで、マリヴェール夫人のあたたかいまなざしの下で、オクターヴとアルマンズは二人だけの空間を持つ。

<Armance ne se trouvait jamais seule avec son cousin qu'à la promenade au jardin, sous les fenêtres du château dont on habitait le rez-de-chaussée, ou dans la chambre de madame de Malivert et en sa présence. Mais cette chambre était fort grande, et souvent la faible santé de madame de Malivert lui faisait un besoin de quelques instants de repos; elle engageait alors ses enfants, c'était le nom qu'elle leur donnait toujours, à aller se placer dans l'embrasement de la croisée qui donnait sur le jardin, afin de ne pas l'empêcher de reposer par le bruit de leurs paroles.><sup>47</sup>

一階は人が住んでいて、庭は監視されている。しかしマリヴェール夫人の部屋で主人公達は二人きりになれる。広い部屋の片隅で夫人は休息し、若者たちは少し離れた窓辺で語り合う。マリヴェール夫人は二重の役割を果たしている。すなわち保護者であり、保証人である。守るとともに、主人公達の純潔を社会に対して証ししなければならない。

マリヴェール夫人のこの二重の役割が的確に証明されるのが、深夜オクターヴの寝室近くで運悪く見つかったアルマンズを救う場面である。嫉妬に苦しむアルマンズはオクターヴがドーマル夫人と密会しているのではと疑い、オクターヴの部屋の近くに隠れて行動を窺う。そしてスーピラヌに発見され、乙女の純潔が逆に疑われる。処女の名誉が汚されかかったこの危機に、マリヴェール夫人はアルマンズを守り、純潔の保証人としてアルマンズを救う。

## 5) 女性の差別

女性の社会的抑圧の最後に、女性の差別について調べよう。不能の告白は小説の結末をくくる重要な主題で、オクターヴはなかなかアルマンズに打ち明けられない。なんとか切りだすが、いつも途中で逃げてしまう。

<la mort me serait moins pénible que le récit que je dois vous faire, mais aussi je vous aime bien plus que la vie. Ai-je besoin de vous jurer non plus comme votre amant [.....], mais en honnête homme et comme je le jurerais à Monsieur votre père si la bonté du ciel nous l'eût conservé><sup>48</sup>。

彼は恋人として愛の告白はできるが、不能の秘密をどうしても口に出せない。恋人として直接アルマンズに告白するのは不可能だが、礼節をわきまえる<honnête homme>として、死んでしまった彼女の父親がもし生きていれば躊躇せずに打ち明けると言う。告白すべきかどうか遠い親戚のドリエ氏に助言を求めに行ったとき、ここでもまた父親、あるいは後見人になったなら少しもためらわずに真実を知らせると、彼は言う。<sup>49</sup>

恋愛・結婚という個人の問題が家の問題に置き換えられてしまう。家長である父親が全権を握り、まずは父権の承認が絶対的な必要事項であると認めている。もしアルマンスの父が生きていて、生理学的な不能者との結婚を認めないと断言したなら、彼らの愛はどうなるのか。オクターヴが打ち明けた場合、こうした拒絶が予想されるのに。

スタンダールはこの点に関して民法典に準拠している。アルマンスはすでに十八歳の乙女であるが、結婚に関しては民法上まだ親権のもとにある。結婚制度は国家の根幹をなす制度であるので、支配階級は家長に有利なように条文を作成してある。情熱におかされやすい若年の男女が理性を忘れて、身分違いの結婚に走ることを防ぐためである。民法上結婚可能な年齢は、男18歳、女15歳であるが、親の承諾が必要十分条件である。結婚はあくまで家と家の繋がり、個人の欲望を満足させるのが目的ではない。こうして民法は男は25歳、女は21歳まで親の同意なしには結婚できないと定めている。<sup>150</sup> 男25歳、女21歳を超えても、それぞれ30歳、25歳までは親から<acte respectueux>という一種の同意書を得なければならない。それぞれ30歳、25歳以降でも、まだ完全に親の監督から解放されず、やはり<acte respectueux>を求めなければならない。ただ親が反対して同意しなくても、この場合は一か月後には結婚は可能となる。こうした民法の結婚条項がオクターヴの決意に反映している。

#### 6) ディスクールにおける抑圧

オクターヴとアルマンスが互いに呼びあうとき使用するのは、<mon cher cousin, ma chère cousine>という親戚を表す社会記号である。たしかに愛の告白がなされない以前であれば、不思議ではない。しかし互いの恋愛感情が確認された後も、愛のディスクールの中に親戚関係の呼び方が混在するのは、違和感を与える。

<Mon cher cousin, lui dit-elle, je ne puis avoir pour vous que de l'amitié; mais personne sur la terre ne m'est plus cher que vous ne l'êtes.>

<mais jamais je n'aimerai personne plus que je ne vous aime; c'est à vous, mon cher cousin, de voir si vous voulez de mon amitié à ce prix.><sup>151</sup>

これらのディスクールでは、<mon cher cousin, ma chère cousine>という家族関係を表す記号は愛の成就の障害として意図的に使用されている。だれよりもあなたが一番かけがえのない人だと、愛の告白をしているのに、二人の関係が<cousin cousine>以上に進むことを阻止している。

ところがオクターヴが瀕死の状態におちいり、二人とも恋愛感情を抑制する必要がなくなる。当然<mon cher cousin, ma chère cousine>という家族記号は放棄され、個体間の関係を表す名が使われる。こうして愛のディスクールが異常な状態から離脱できるはずであった。しかし不能の男主人公と経済的な資質に欠ける女主人公の関係はまだ完全に正常化されない。この段階では結婚という社会的認知にまだ到達していないので、ディスクールは別の振れ状態におちいる。すなわち直接話法と間接話法が混在してしまう。

<Je vous jure, reprit Armance les larmes aux yeux, que de ma vie je n'ai aimé qu'Octave et qu'il est de bien loin ce que je chéris le plus au monde; mais je ne puis avoir pour lui que

de l'amitié, ajouta-t-elle en rougissant beaucoup du mot qui venait de lui échapper, et jamais je ne pourrai lui accorder ma confiance, s'il ne me donne sa parole d'honneur que quoi qu'il puisse arriver, de sa vie il ne fera aucune démarche directe ou indirecte pour obtenir ma main. ... Je vous le jure, dit Octave profondément étonné; ... mais Armance me permettra-t-elle de lui parler de mon amour?><sup>152</sup>

愛の高揚とともに<mon cher cousin, ma chère cousine>という家族記号が使われなくなり、愛の呼称のprénom<sup>153</sup>が入り込む。そしてふたりの距離が近づき、抑制が一挙に解除されかねなくなる。そこで直接話法一人称で始まったディスクールは相手に対するとき直接話法二人称ではなく、間接話法三人称が使用されるというまったく異常な振れが引き起こされ、それが自由な愛の吐露を邪魔する。二人が面と向かって対話しているにもかかわらず、三人称の使用により、二人の間に距離が作られる。対話は直線的に進行せず、ジグザグに進み、対話の内容の恋愛感情は高揚できない。

婚約が決まった後でも、主人公達は<mon ami, ma bonne amie>と呼びあう。オクターヴが感極まって危うく不能の秘密を告白しそうになった例外を除いて、<sup>154</sup> 二人の会話はvouvoyerで語られる。<mon ami, ma bonne amie>にせよ、vouvoyerにせよ、これらは恋愛で結ばれる若者の言葉ではない。政略的に結婚した旧制度の夫婦が使用する言葉である。オクターヴの両親達の世代の言葉である。<sup>155</sup> 主人公達は貴族社会の礼法に従うことにより、言葉の疎外に直面し、自分たちの感情を直接的に伝達できない。とくにアルマンスには慎み深くあれという乙女のハンディキャップが言葉にまでつきまとう。オクターヴはtutoyerをなんとかするが、彼女はどんなにパテチックな局面でも、<ah! cher ami, que vous êtes cruel!><sup>156</sup> と、vouvoyerを使い、社会的束縛から逃れられない。

註

<sup>151</sup> *De l'Amour*, t.1, Cercle du Bibliophile, p. 16. 邦訳は人文書院『恋愛論』を参照。p. 8 - 9。

<sup>152</sup> *Armance*, p. 13.

<sup>153</sup> Cf. *Ibid.*, p. 17.

<sup>154</sup> Cf. *Ibid.*, p.84-85.

<sup>155</sup> *Ibid.*, p. 9.

<sup>156</sup> Cf. *Ibid.*, p. 30.

<sup>157</sup> Cf. *Ibid.*, p.127, 216 et 232.

<sup>158</sup> *Ibid.*, p. 165. Voir p. 132.

<sup>159</sup> *Ibid.*, p.32-33.

<sup>160</sup> *Ibid.*, p. 56.

<sup>161</sup> *Ibid.*, p. 18. Voir *De l'Amour*, p.28:<Toutes ses actions eurent d'abord à mes yeux cet air céleste qui sur-le-champ fait d'un homme un être à part, le différencie de tous les autres.>

<sup>162</sup> *Armance*, p. 162.

<sup>163</sup> Cf. *Ibid.*, p. 102.

<sup>14</sup> Cf. *Ibid.*, p. 58.

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 131. Voir aussi p.133:<éternelle amitié>.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 134.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 7.

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 37.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p. 55.

<sup>20</sup> *Ibid.*, p. 66.

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. 170.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. 63.

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 237.

<sup>24</sup> Torquato Tasso, *Jérusalem délivrée*, traduit en français par le Prince Le Brun, Lefèvre Éditeur, 1836, p.77-78.

<sup>25</sup> Voir *Mélanges littérature* p.27-28. *San Francesco a Ripa*, p. 86.

<sup>26</sup> Cf. *Armance*, p.94:<Ceux qui avaient mal au foie se livrèrent, à cette occasion, à de tristes réflexions sur la légèreté des grandes dames qui reprenaient les façons d'agir de la cour de Louis XIV. >

<sup>27</sup> *Ibid.*, p.71:<Les bonnes amies de madame de Bonnavet, qui la regardaient de loin, se livraient aux jugement les plus téméraires>.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p.73:<L'effet électrique produit sur madame de Bonnavet par cet instant de beauté parfaite et le naturel plein de sentiment qu'il communiquait à ses accents, la rendirent vraiment séduisante. [...] Quelle triomphe pour la malignité qui l'observait.>

<sup>29</sup> *Ibid.*, <madame de Bonnavet passa en calèche sur le boulevard avec son bel Octave. C'est ainsi que parlèrent les hommes de leur société qui les aperçurent. [...] Dans les circonstances graves vers lesquelles nous marchons, ajoutaient ces pauvres gens, il est bien maladroit de donner au tiers-état et à l'industrie l'avantage de la régularité des mœurs et de la décence des manières.> p. 94.

<sup>30</sup> Cf. *Ibid.*, p. 110.

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 250.

<sup>32</sup> Voir Duchesse de Maillé, *Souvenirs des deux Restaurations*, Librairie Académique Perrin, p.18-19.

<sup>33</sup> *Code Napoléon Traité du mariage*, P. C. Demolombe, Imprimerie Générale, 1874, p. 1.

<sup>34</sup> *Armance.*, p.297-298.

<sup>35</sup> *Ibid.*, p.58.

<sup>36</sup> *Ibid.*, p. 201.

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 243.

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 248.

<sup>39</sup> Voir *Ibid.* p.275: <que m'importe? l'opinion après tout n'est importante pour une fille riche qu'autant qu'elle songe à se marier.>

<sup>40</sup> *Ibid.*, p. 244.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 207.

<sup>42</sup> *Ibid.*, p.159-160.

<sup>43</sup> *Ibid.*, p. 162.

<sup>44</sup> *Ibid.*, <il avait compromis la tranquillité.> p. 181.

<sup>45</sup> *Ibid.*, p. 172.

<sup>46</sup> *Ibid.*, p. 46.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 232.

<sup>註46</sup> *Ibid.*, p. 276.

<sup>註49</sup> *Ibid.*, <Octave lui demanda s'il devait absolument confier à mademoiselle de Zohiloff un secret fatal, qu'il n'eût pas hésité à avouer avant son mariage au père ou au tuteur d'Armance.> p.283.

<sup>註50</sup> Voir *Code civil*, article144. Egalement C. B. M. Toullier, *Le droit civil français* suivant l'ordre du Code, tome 1<sup>er</sup>, chez B. Warée, 1819, p.454-463.

<sup>註51</sup> *Armance*, p. 214.

<sup>註52</sup> *Ibid.*, p. 215. Souligné par nous.

<sup>註53</sup> Voir *Ibid.*, p.84: <Ah! je me soumettrai à votre arrêt, mon noble ami, mon cher Octave! La fièvre lui donnait l'audace de prononcer ce nom à demi voix, et elle trouvait du bonheur à le répéter.>

<sup>註54</sup> Voir *Ibid.*, p.278: <je t'adore, tu ne doutes pas de mon amour; mais quel est l'homme qui t'adore? C'est un monstre.>

<sup>註55</sup> *Ibid.*, p. 266. <Oui, ma bonne amie, je ne voudrais pas jurer que la facilité à se piquer que montre Octave.>.

<sup>註56</sup> *Ibid.*, p. 294.